



家族と近代

橋爪大三郎

Hoshizume Daisaburo

東京工業大学大学院社会理工学研究科教授
一九四八年神奈川県生まれ。
東京大学大学院社会学研究科博士課程修了。
著書に「言語ゲームと社会学論」
「仏教の言説戦略」(共に勁草書房)
「はじめての構造主義」(講談社現代新書)
「性愛論」(岩波書店)など。

近代家族は 家族をどくまどくも はみ出してゆく

ふつうにこの社会に生活して
る大多数の人間にとって、家族
(family)が存在することなどあま
りにも自明であろう。父がいて母
がいて、子供がいて、共に暮らす
血のつながった何人かが家族を営
む。なにか文句があるか、という
わけだ。

けれども、最近のいくつかの学
問——歴史学、人類学、社会学な
ど——は、それ以上のことを語っ
てくれる。たとえば、子供が大人
と違った存在として、愛情をこめ
て育てられるようになったのは、
古いことではない。台所で調理し
たての温かい料理を家族が囲むよ
うになったのも、ごく最近である。
専業主婦は産業化のスタートとも
もに生まれ、産業化の成熟とともに
に消滅しようとしている、などと
言われる。要するに、われわれの知っ
ている家族は、たまたまこの数百年
の間に生まれた「近代家族」にす
ぎない、というのである。

人類学は、さまざまな民族の家
族のあり方を片っ端から調査した
結果、どこにも例外なしに、血の
つながった人びとの生活する最小
単位——核家族(nuclear family)
——が存在すると主張した。なる
ほど、近代家族も、人数や家族構
成からみる限り、核家族なのは確
かだ。そして社会学は、産業化の
進展につれて、伝統的な大家族
(extended family)が核家族に変化
していく、と主張した。近代家族
は、同じ核家族でも、産業社会に
適応したごく特殊な家族のあり方
なのである。

核家族と「近代家族」
たしかに、近代化(modernization)
が進むにつれて世界中で起こった
のは、家族の核家族化と、機能の
単純化だった。伝統社会でしばし
ばみられる、核家族よりもサイズ
の大きな家族形態(日本の場合は、

イエ)は解体されていった。そし
て、家族の役割と言えば、子供を
養育し、消費生活の最小単位であ
ることにすぎなくなっていた。
産業化以前の社会は、農業社会
である。大部分の人びとは、家族
単位で農地のうえに点々とはりつ
き、耕作に従事していた。当然、
人びとの移動は少ないし、家族構
成はむしろ大人数であると都合が
よい。こうした基礎のうえに、あ
る社会は親族組織を発展させ、ま
たある社会は封建制を、ある社会
は官僚制を発展させた。

近代化とは、簡単に言えば産業
化(=工業化 industrialization)で
あり、資本主義経済がどんどん広
まっていくことである。農業は片
隅に追いやられ、大部分の人びと
は工業や、第三次産業(サーヴィ
ス業)に従事するようになる。工
業は農業と違って陽当たりなど関
係ないから、適当な場所にいくら
でも密集することができ、近代都

市ができあがる。人びとは田舎か
ら都会に出て来て住みついては、
仕事の関係でしょっちゅう移動す
る。産業社会は労働力に高度な移
動性を要求するから、家族が核家
族であると都合がいい。もうひと
つ重要な点は、産業社会は生産力
が高いということ。たいがいの物
資は工場で生産され、市場を通じ
て商品として販売される。家族は
それを購入する。そのための現金
は、工場などで賃労働して稼いで
くる。家族は、ものを生産する機
能を失って、消費しかできない存
在になった。

産業革命のあと、このような変
化が世界中で起こった。そこで、
夫婦と子供からなる核家族こそ、
近代的で新しい家族だというイメ
ージが広がった。実際には、核家
族は大昔からあった。核家族とい
う形態そのものが、特に近代的な
わけでも何でもない。そこで最近
では正確を期して、近代に特有な

子供が愛情をこめて
育てられるようになったのも、
台所で調理したての温かい料理を
家族が囲むようになったのも、
ごく最近である。

家族のことを、近代家族という。

自由意思のロジック

ところで、近代は産業革命と資本主義経済をもたらしたが、それは近代の一面にすぎない。近代そのものは、もっと大きな出来事。近代的な価値を実現しようとする運動である、と考えられる。

近代の掲げる価値のなかで、もっとも大事なものは、自由であろう。

自由。個人が、自分以外のなものにも束縛されない権利。近代は、あくまでも自由を追求し、確立するための闘いだ。近代の制度（社会の仕組み）は、人びとの自由を損なうことがないように、注意深く作られている。

人間は自由である。自由とは、自分以外の誰かに拘束されない、ということである。自由な個人と

自由な個人のあいだには、さしあたり何の関係もない。そこで、自由な人間同士が「契約」を結ぶ。

自分で自分の自由を拘束する。そうやってはじめて、人びとのあいだに社会関係が生まれる。近代社会では、契約が絶対であり、契約がなければ社会も国家も成り立たない、と考えるのだ。これが「社会契約説」や「憲法」のもとになる発想である。

近代社会では、人びとの自由意思（＝選択）の結果であると証明されないものは、存在してはいけなと考える。封建社会が市民革命によって打ち倒されたのも、人びとがそのように考えたからである。国家（政府）や企業（株式会社）や学校や組合や財団や教会や……もみな、人びとが自由意思（＝選択）によって人為的に設立した機関——アソシエーション——であると信じられている。そして実

際、そのようなものとして運営される。

しかし人間は、自分の所属する集団をすべて、選択できるものだろうか。

たとえば、家族。子供は、とにかく生まれてくるだけで、親を選べないし、だいたいお前は生まれていのかなどと何の相談もない。この意味で、家族は自然に出来上がったものであり、アソシエーションと考えるのには無理がある。家族は自然な存在——日本人は、こう考えたくなる。

けれども近代は、あくまでも選択（各人の自由意思）のロジックでもって、家族を解釈しようとする。たとえば、社会学者のT・P・ソーンズは、核家族の意味あいを、定位家族（family of orientation）と生殖家族（family of procreation）とに区別した。子供からみれば、家族は生まれて育つ場。いっぽう



近代は、人は生まれながらにして平等であることを前提とする。

親から見れば、家族は夫と妻が互いを選択しあつた結果、成立したものだ。そして人間は誰しも、定位家族に生まれ、やがて巣立って、大多数の人びとが新しく生殖家族を形成するにいたる。そしてそのうちの後者すなわち生殖家族（両性の選択＝合意にもとづく家族）こそが、人間にとって家族本来のあり方だということになる。家族のような基本的な集団が人間個人の選択から無縁なままでは、近代が不完全なものになってしまうからだ。

選択を中心に家族を解釈する結果、夫と妻が自由意思により選択しあつて家族が形成されるという観念、すなわち、「愛」が強調される。愛こそは、経済的利害や政治的権力から独立な、当事者の選択を正当化する究極のものなのだ。愛があるから、結婚があり、家族が営まれる。夫婦のあいだに生まれた子供は、愛の結晶であり、愛

情をもつて育てなければならぬ。近代家族には、愛の観念が不可欠である。（ちなみに日本国憲法の、「結婚は両性の合意のみにとづく」という条文は、合意＝選択＝契約の観念によってイエ制度を打倒しようとする、戦略的な目的をもつていたのではないか。）

「愛」のシステムとしての家族

家族を、愛という価値が優位する場とみなすという着眼は、パースンズの流れをくむN・ルーマンにも受け継がれている。

愛は、近代家族を支えるイデオロギーである。愛は、自由（選択と自己責任の原則）と相性がよい。近代の根本原理である自由は、まず信仰（良心）の自由を求めることから始まった。宗教改革のため教会は分裂し、国家の介入を招

いて血みどろの争いが繰り広げられた。アメリカ合衆国は、信仰の自由が脅かされることを嫌って、新大陸に渡った人びとの子孫が作った国である。信仰（教会）は個人の選択であり、国家はそこに干渉すべきではない。近代の大原則のひとつである、政教分離である。カトリックが聖母マリア（母の理想像）に力点を置くのにひきかえ、新教は聖家族（父＝大工のヨセフ、母＝処女マリア、息子＝イエス・キリスト）のあるがままを家族の原型と考える。三人は血のつながりがなくても、神の配剤によって、理想的な家族を営んでいる。そう、家族とは役割なのである。

つぎに重要な近代の自由は、利潤を追求する自由。そして、法と社会秩序を創出する自由。正しいことを知り、のべ伝える自由である。利潤を追求するため、人びとは

資金を集め、企業を設立し、生き残りをかけて必死に競争する。この市場経済のメカニズムに、国家も伝統社会も介入しない。法と社会秩序を創出するため、人びとは立法議会に代表を送り、税を負担し、法が厳格に執行されるかどうか監視する。この民主主義のメカニズムに、国家も市場経済も介入しない。正しいことを知り、のべ伝えるため、人びとは科学を研究し、事実を取材し、その結果を報道し出版する。この言論のメカニズムに、国家もほかのどんな機関も介入しない。これらそれぞれの領域が、別々に動くところから、近代社会は成り立っている。ルーマンのべているように、愛／貨幣／権力／真理は、互いに独立なメディアなのである。

この四つの領域に共通するのは、個々人が自分の責任で意思決定を行なうということ、すなわち、選択である。商品を買うのも会社に

選択を中心に、
家族を解釈する結果、
夫と妻が自由意思により選択しあつて
家族が形成されるという観念、
すなわち、「愛」が強調される。



投資するのも、自由であるが、それには責任が伴う。失敗すれば倒産が待っている。政治的な選択(たとえば投票)を行なうのは、個人の人々の責任である。不適当な選択をすれば、その結果は自分にふりかかってくる。正しいと自分が信じる学説をのべたり報道を行なったりするものも、個人々の責任である。真理をめぐる争いに敗れば、誰にもかえりみられなくなる。同じように、愛の名のもとに互いを選択しあい、家族をこしらえるのも個人々の責任である。失敗すれば、離婚が待っている。愛がなければ、離婚しなければならぬ。家族をアソシエーション(選択の結果)とみなす以上、それが当然の帰結である。

近代家族は、愛を動機とする、個人々の役割の束である。だからこそ、同性愛のカップルがこしらえる家族(父が二人、または母が

二人)や結婚していない他人同士が集まって子供を育てる家族も、ノーマルな家族と同様に扱われることを要求するのである。そもそも両者に、違いはないからだ。

近代家族のパラドクス

近代家族は、近代社会のメンバーを、再生産しなければならぬ。しかし、それはうまくいくだろうか。

その最大の逆説は、「自立」した個人を「育てる」という点にある。子供はまったく無力な状態で誕生し、親に依存しながら成長する。こんなな一方的な関係のもとで、果たして「すべての人間は平等だ」と信じる近代的個人が育つのか。これが中国の伝統家族なら、問題は少ない。儒教は、学問の有無年齢、性別によって人間をランク

づける「差別道徳」でできているから、親を尊敬しなさいと頭ごなしに駈けると、かえって社会への適応が容易になる。

近代家族の場合は、子供を二重にみることで、この逆説を解消しようとする。実態から言えば、親と子供は対等でない。親は子供を、一方的に支配している。けれども、あるべき姿から言えば、親と子供は対等である。そこで子供の実態と無関係に、人格の尊厳とか人権とかいう一種の仮説構成体をこしらえ、子供の内部に、親からも不可侵の領域を設定する。親と子供は一方的な関係だとしても、それは役割にすぎない。親子の役割をひき受けたのは、親であり子である以前の対等な人間なのだ、と思いつくようにする。さらに、親の横暴から子供を守る法律をつくって、家族を社会の監視のもとにおく。



生きていく権利は平等だが、生きていく場所は？

とはいえず近代家族は、孤立した小集団である。子供がほんとうに自分を社会の対等な一員だと自覚できるように、家族の外に出て、社会化(集団的な規律訓練)を受ける必要がある。これが、学校である。近代家族と学校教育は、表裏一体のものなのだ。

近代家族は、労働力を市場で売って、家計を支える。親から子供に受け継がせる、家業や資産といったものはない。だから子供は、生きていくために、学校教育を受け技術や身につけなければならぬ。産業化が進むと、単純労働よりも、ますます質の高い労働力が必要になってゆく。そこで近代家族は、子供になるべく高い学校教育を受けさせようとする。この結果、子供の人数が少なくなる。教育費がかかるからだ。また、家庭で子供を養育するための、親の権威や価値観が空洞化していく。学校

教育の価値観が家庭に入り込み、親が学校と独立の価値観を持つてくるからである。

人口問題と近代化

近代家族は、人口問題と密接な関係がある。

先進国では、子供の数が減り、少子化が進んでいる。いっぽう、第三世界は人口爆発に見舞われている。このコントラストは、何を意味するのだろうか。

人口爆発は、近代化と無関係でない。先進国もかつては、人口が急激に増加した。伝統社会は医療や保健衛生が不備なため、多産多死(子供は半ダース、でも大人になるのは数人)である。それがまず、医療が普及する結果、多産少死に移行し、最後に少産少死におちつく。西欧はこの間、数百年を要し、日本は百年を要した。多産

多死→多産少死→少産少死と移行するあいだに、人口が急増する。日本では、幕末の三千万人が、百年あまりのあいだに四倍以上に膨れ上がった。第三世界で起こっているのは、かつて西欧世界や日本で起こったのと同じプロセスなのだ。

人口爆発がこのまま止まらなければ、地球環境は破滅する。問題のカギは、いつ多産から少産への転換が起こるかである。

第三世界は、医療や保健衛生など、ほんのわずかな産業文明のおこぼれにあずかるけれども、資本や技術が不足して、まともな市場経済が育っていない。したがって貧しい。家族のあり方も伝統的なままである。子供は、家族が生きていくための労働力としても、親の老後の生活を保障するためにも、必要である。そういう動機から、人びとは子供を産む。子供の

人数が親(すなわち、それぞれの家族)に任されている限り、そして親たちが伝統社会の価値観に従っている限り、人口が増えるのは自然のなりゆきである。

各国の経験によると、家族は、①所得、②教育、が一定水準以上に高まると、子供の数を少なくする傾向がある。要するに、近代家族としてふるまい始めるのだ。そこで、人口爆発にブレーキをかけるには、第三世界の国々の経済発展を促し、教育を普及すればよいと言える。これとてもひと筋縄では行かないが、やんわりと(II)人びとの人権を尊重しながら)人口を抑えるには、これしかない。

「近代」は家族に何をしたか

こと人口に関しては、近代家族が問題解決の切り札である、とい



近代家族は、近代社会のメンバーを、再生産しなければならない。その最大の逆説は、「自立」した個人を「育てる」という点にある。

う印象を与えるかもしれない。だが、近代家族も多くの問題を抱えている。近代が個人の自立と選択を強調することが、家族の土台(血縁の観念)を掘り崩してしまうのである。

人びとの寿命がのび、子供の人数が減った結果、子育ての期間は結婚生活のごく一部になってしまった。主婦たちは、子育てが終わるのを待ちかねたように、フルタイムの勤めに出る。不倫も増える。離婚も増える。どのような家族が営まれるかは、ますます人びとの選択に依存するようになった。個人の選択の度合いが強まれば、家

族はその分だけ不安定になる。近代家族はいよいよ、個々人が選択する人生を危うげに束ねただけのものにすぎなくなっていく。

もうひとつ、家族を脅かしているのは、情報化の波である。テレビをはじめとするマスメディアの普及は、家族内のコミュニケーション構造を根底から変質させた。家族はもはやいかなる価値観や文化を体現することもできなくなつた。家族は、子供を躰ける基盤を失いつつある。親に干渉されすぎると子供たちも、親に放任されすぎると子供たちも、無規範・無連帯(アノミー)に陥っていく。ナイフ、

銃、ドラッグ、売春……家族の外側、情報社会の谷間に子供たちはますますのめり込んでいく。

近代は家族に何をしたか？ 近代は、社会から個人を析出させた。家族は、近代に適応し、個人の集まり——近代家族になった。けれども近代家族は、安定したものでなく、変化し続けている。人類はこれまで、家族のなかで産まれ、家族とともに生活してきた。その伝統が、脅かされている。近代家族は唯一、家族でありながら伝統的な家族のあり方をどこまでもはみ出していく可能性を秘めた存在なのである。

